

令和三年度 入学者選抜〔推薦に基づく選抜〕

小論文

注 意

- 1 問題は **1** と **2** の2題あり、3ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は六〇分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 、 や 。 や 「 などそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められた欄に記入しなさい。
- 7 下書きやメモはこの問題冊子の余白を利用しなさい。

【資料1】から【資料3】はそれぞれ次のことを示したものである。

◇【資料1】は国際貧困ラインに基づく地域別貧困層の数

◇【資料2】は5歳未満児死亡率（出生数1,000人当たりの死亡数）

◇【資料3】は若者（15歳～24歳）の識字率

【資料1】から【資料3】のそれぞれの資料に触れながら、共通して読み取れることを挙げ、そのことに対して国際社会がどのような取り組みをしていくべきかについて、あなたが考える具体的な取り組みとその理由を、三〇〇字以内で述べなさい。ただし、その取り組みを行っていく上で生じる課題にも必ず触れること。

なお、この問題の解答にあたっては、段落分けの必要はありません。最初のマス目から書き始めること。

（注）【資料2】【資料3】の各地域で取り上げた国は、それぞれの地域の特色をよく表している国として本校で選んだものである。

【資料1】 国際貧困ラインに基づく地域別貧困層の数（2015年）

地域	貧困ライン (ドル/日)	貧困層の数*2 (百万人)	総人口 (百万人)
東アジア・大洋州地域	1.90	47.18	2036.62
ヨーロッパ・中央アジア地域	1.90	7.15	487.04
ラテンアメリカ・カリブ海地域	1.90	25.90	626.57
中東・北アフリカ地域	1.90	18.64	371.65
サブサハラ・アフリカ地域*1	1.90	413.25	1005.57
世界全体	1.90	735.86	7355.22

*1「サブサハラ・アフリカ地域」と「サハラ以南アフリカ」は同義である。

*2「貧困層の数」は「貧困ライン（1日1.90ドルで生活する人）」未満の数を示している。

「THE WORLD BANK」より作成

【資料3 若者（15歳～24歳）の識字率(%)（2018年）】

地域	国	男	女
東アジア・大洋州地域	オーストラリア	—	—
	中国	100	100
	日本	—	—
	タイ	98	98
ヨーロッパ・中央アジア地域	チェコ	—	—
	ドイツ	—	—
	カザフスタン	100	100
	ロシア連邦	100	100
ラテンアメリカ・カリブ海地域	アルゼンチン	99	100
	ブラジル	99	99
	キューバ	100	100
	ジャマイカ	94	99
中東・北アフリカ地域	イラン	98	98
	エジプト	89	87
	サウジアラビア	99	99
	チュニジア	97	96
サブサハラ・アフリカ地域	チャド	41	22
	ニジェール	49	32
	中央アフリカ共和国	49	27
	ギニア	57	37

*「—」はデータがないことを示している。

「ユニセフ 子ども白書2019」より作成

【資料2 5歳未満児死亡率（出生数1,000人当たりの死亡数）（2018年）】

地域	国	出生数1,000人 当たりの死亡数
東アジア・大洋州地域	オーストラリア	4
	中国	9
	日本	2
	タイ	9
ヨーロッパ・中央アジア地域	チェコ	3
	ドイツ	4
	カザフスタン	10
	ロシア連邦	7
ラテンアメリカ・カリブ海地域	アルゼンチン	10
	ブラジル	14
	キューバ	5
	ジャマイカ	14
中東・北アフリカ地域	イラン	14
	エジプト	21
	サウジアラビア	7
	チュニジア	17
サブサハラ・アフリカ地域	チャド	119
	ニジェール	84
	中央アフリカ共和国	116
	ギニア	101

「ユニセフ 子ども白書2019」より作成

次の二つの文章を読んで、それぞれの内容に触れながら、「発見」についてあなたの考えを五〇〇字以内で述べなさい。ただし、段落構成は三段落または四段落とし、主張の説明として具体的な例を示すこと。

A

※鈴木先生のお話の中でもう一つおもしろいなと思ったのは、研究者にとってはチャンスも大事だということ。一生懸命に研究していると、突如として新たな発見につながるようなチャンスに巡り合うことがある。そういうことがあるといえます。先生は「セレンディピティ」という言葉を使っていました。

セレンディピティとは、科学者の間でよく使われている言葉です。日本語に訳すのは難しいのですが、たまたま出会ったことから研究が大きく進んでいくというイメージでとらえてください。「思わぬ発展につながる偶然」とでも訳せまじょうか。その偶然が実は大事で、偶然に導かれて研究が発展するのです。

研究者が当初から問題意識を持っていて、「これはどうすればいいのかな？」と考えていると、あるときたまたま見つけたものにひらめきを感じ、「あっ、これが役に立つんだ」と気づいて、行き詰まっていた研究に突破口が開かれる。研究が大きく飛躍するきっかけは偶然の出会いによることが多く、その偶然の出合いのことをセレンディピティと呼んでいます。

ただし、偶然といっても、それは研究者が何もしないでたまたま思いつくというものではありません。鈴木先生がおっしゃっていたように、一生懸命に研究していると、不思議とそういう出合いに恵まれるのです。

ニュートンがリンゴが落ちるのを見て、それを当たり前だと見過ごさず、「なぜ落ちるんだろう？」と研究し、万有引力の法則の発見につながったという逸話があります。本当にあつたことなのか、実は曖昧なのですが、この場合、リンゴが落ちるところに出くわしたのがセレンディピティです。

※鈴木先生：ノーベル化学賞を受賞した鈴木章氏（北海道大学名誉教授）のこと。テレビ番組で質問する機会があり、その話を参照している。

（池上彰『なんのために学ぶのか』 二〇二〇年 SB新書）

B

※僕からすれば、新しい発見とは、多分「自分に関する発見」なんです。世間の評価なんてどうでもいい。自分が今まで知らなかったことがある。そして、自分の中でそれがわかった、その瞬間にとんでもなく「あっ！」と思うわけです。アルキメデスが風呂の中で考えて、「浮力」についてひらめいた瞬間に裸でシラクサの町を走ったという話がありますね。それはもう、大発見だったわけです。それでノーベル賞をもらえるときか、そういう話じゃない。自分が今まで風呂に入ったときに、身体が軽くなるのはわかっていたんだけど、どこまでどういうふうに軽くなるのかさっぱりわかってなかったのが、あ、これは「浮力」なんだとわかった瞬間に、もう、きちんと、定量的にわかるわけですよ。そうすると、ちょうど、ひどい近眼の人がいい眼鏡をかけたような感じで、スキッと世界が見えた。そしたら、ものすごくうれしくて、飛び上がる。それが発見ですよ。発見にはそういう喜びがあって、それが本来の創造でしょ？ 発見と同時に、自分が変わっていく喜びがあるのが人間なんです。

だから、別にアルキメデスの時代じゃなくても、伝記に残るような偉人じゃなくても、ごく普通の人がそういう発見をできるはずなんです。※僕：養老孟司。文章は羽生善治との対談での発言。